櫻園通信 24. 平成 27 年 6 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

白河楽翁の心願書と渋沢栄一の解説

渋沢栄一の時代から、旧養育院長室に、額が飾られていた。昭和 20 年 4 月の米軍による空襲で、養育院の多くの部分が焼夷弾に焼かれた。本院の多くの建物は焼失、107 名の犠牲者が出、コンクリートの代替像になっていた渋沢像も焼け焦げた。養育院に関する多くの歴史的資料もこのとき焼失したが、養育院長室からこの額は持ち出された。それほど大切にされてきたものであり、現在は表装しなおして展示ケースに収まっている。江戸時代、白河藩主松平定信(白河楽翁)が筆頭老中になり寛政の改革に乗り出したとき、吉祥天に納めた心願　書の写しである。松平定信の作った七部積金の制度に対する感謝の念こめられた渋沢の賛(解説文)が組み合わされて、一つの額にしてあるのである。

まず右側の白河楽翁の心願書であるが、桑名の松平家(白河から移封)の家宝となっている。

養育院研究家の長沼友兄氏によれば、現物は三重県桑名市の桑名城本丸跡の、鎮国守国神社(ちんこくしゅこくじんじゃ)にある。松平定綱(鎮国公)、松平定信(守国公、楽翁公)を祀る神社の宝物のひとつとなっており、ここに掲げられているのは能筆の養育院幹事、前田源平の手になる写しである。

現代語に意訳すると、以下の内容であり、今日でも為政者のあるべき決意として、しばしば引用されている。

天明八年正月二日松平越中守奉懸一命心願仕候、當年米穀融通宜しく格別の高直無之下々難儀不仕安堵靜謐仕竝に金穀融通宜、御威信仁恵下々え行屆き候様に越中守一命は勿論之事、妻子之一命にも奉懸候事必死に奉心願候事、右條々不相調困窮御威信御仁德不行屆人々解體仕候萬々御座候はゞ、只今之内に私死去仕候様に奉願候、生ながらへても中興の功出來不仕汚名相流し候より、只今の英功を養家之幸並に一時之忠に仕候へば死去仕候方却反つて忠孝に相叶ひ候義と奉存候、右の仕合に付き以憐愍金穀融通下々不及困窮、御威信御仁恵行屆、中興全く成就之義偏に奉心願候
敬白

天明八年正月二日。松平越中守の一命に懸けて心願があります。今年のお米の融通がうまくゆき格別の高値無く安定し、政道の権威が保たれて下々にも行き渡りますよう、私自身の一命は勿論のこと、妻子の一命にもかけ、必死に心願致します。

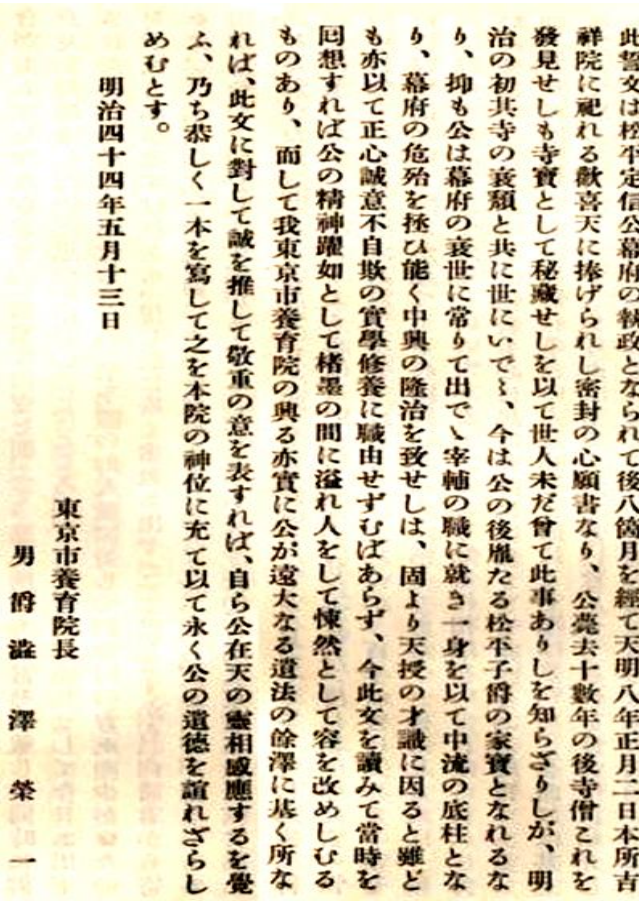
右のことがうまく行われず、人民困窮し政治がうまく行われず、万が一、人々が困るようなことがあるようなら、今すぐにでも私が死んでしまうにようお願い申上げます。

生きながらえて世の中を再生することができず汚名を流すようであれば、現在の老中という地位の栄光は養家の一時の幸い、忠義に過ぎませんから、死んでしまった方が却って忠孝にかなうと思います。そのようなわけですから、憐れみを以て経済がうまくゆき、人々が困らないように政道の権威、仁恵が行き届き、世の中の立て直しが成就しますよう偏にお願いいたします。

七部積金の恩恵に深く感謝する渋沢栄一は、この制度を創った松平定信（楽翁）に深く傾倒している。白河市の地元市民や定信を崇敬する人々が、定信を祭神とする南湖神社の造営を願うとき、神社設立認可への政治的援助、多額の寄付、揮毫などを行い、大正11年（1922）の立柱式（地鎮祭）に参列している。また、院長としての養育院への出勤日は楽翁の月命日とし、伝記である『楽翁公伝』の出版に力を尽くしている。養育院における昭和4年6月の楽翁公百年祭で次のように述べているので引用する。

［中略］私が公（松平定信）を知ったのは明治七年。東京府共有金の取締の事を、時の府知事大久保一翁氏から申しつけられてからでありまして、［中略］　然らば此の金はどこから来たかと調べて見ると、これは楽翁公の経営せられた、例の七分金と称する江戸市中の積立金でありました。公は特に申述べるまでもなく、政治上非常な緊縮方針を執られ、節倹を勧められ、自ら実行した方であります。其処で当時の江戸に於ける各町の費用を節約せしめることとし、町奉行と相談の上、年々の経費を出来るだけ節して、その一分を給与金に振当て、二分を此の経費を納めた人に割戻し、而して残り七分を積立て利殖したのであります。即ち此の資金はあるいは貸金とし、又は土地を買入れ、更に穀類をも買持ちして、資金の維持と増殖とを図った、これが七分金と名づけられたもので、明治維新後、総額百五・六十万円が東京府に引継がれて共有金となって居ました。私は斯様な楽翁公の余徳を知り、公がただの政治家でなく、経済的にも社会的にも充分手腕のある方であると覚ったのであります。［中略］養育院の経営上の費用は共有金から支出されていましたので、現在の東京市養育院は楽翁公あったたればこそ今日の壮大なる規模を有するに至ったのでありますから、公の命日たる五月の十三日には毎年必ず楽翁公祭を養育院内で開いて居ります、又共有金は此の外に只今の商科大学の前身たる、商法講習所とか、瓦斯会社となった瓦斯局とか、東京府市庁舎、その他道路・橋梁・墓地等諸設の公共事業に用ひられたのであります。

然し乍ら、当時は未だ公が変ったお方であるという位の考しか持って居ませんでしたが、後に公が本所の吉祥院に納めて居られた心願書を養育院の関係者から示されまして、その荘重な而も真剣な意気に感じ入りました、［中略］　初めて之を拝見した私は先ず疑ったのであります。何故なればあれだけ優れた政治家であり学問も広く、文雅に長じ而も経済上のことにも深く意を用ひられる人にして、「若し自分の願いが聞届けられないなら、一命を取って下さい」とまで記されたのはどう云ふ訳か、少し業々し過ぎるではないかと云ふ風に感ぜられたからであります。然しよくよくその事情について考へて見ますと、公の老中になられた当時は、実に日本の国の政治を執るには容易ならぬ時でありまして、全く一身を捨てかかる大覚悟を要する場合であつたのであります。［中略］　兎に角公が老中として立たれるについては真に悲壮な御考えであつたとお察しするのでありまして、右の心願書の如きは公の確固たる御覚悟の程を知る唯一のものであると思ひます。［中略］　誠に当時の幕政は日に乱れて、一大危機に立って居たのであります から、その衝に当るに際しては、右のような一身をかけた必死のこの心願書を認められたのも道理でありましょう、そしてどことなく強硬な願意が籠めてある処に真実悲壮な感じがあり、真剣さが現れて居るのだと思ひます。［中略］　今日こういう人が廟堂に立って居たらと思ひます。殊更現代の政治の善し悪しを私が申すのではありませんが、ただ公の如き賢相があつたらと心から渇仰の念を禁じ得ないのであります。［後略］（六月十四日東京商工奨励館に於ける講演）



此誓文は松平定信公幕府の執政となられて後八箇月を經て天明八年正月二日本所吉祥院に祀れる歓喜天に捧げられし密封の心願書なり、公薨去十數年の後寺僧これを發見せしも寺寶として秘藏せしを以て世人未だ曾て此事ありしを知らざりしが、明治の初其寺の衰頽と共に世にいでゝ、今は公の後胤たる松平子爵の家寶となれるなり、抑も公は幕府の衰世に常りて出でゝ宰輔の職に就き一身を以て中流の底柱となり、幕府の危殆を拯ひ能く中興の隆治を致せしは、固より天授の才識に因ると雖ども亦以て正心誠意不自欺の實學修養に職由せずむばあらず、今此文を讀みて當時を回想すれば公の精神躍如として楮墨の間に溢れ人をして悚然として容を改めしむるものあり、而して我東京市養育院の興る亦實に公が遠大なる遺法の餘澤に基く所なれば、此文に對して誠を推して敬重の意を表すれば、自ら公在天の靈相感應するを覺ふ、乃ち恭しく一本を寫して之を本院の神位に充て以て永く公の遺德を誼れざらしめむとす。

明治四十四年五月十三日

東京市養育院長

男爵　澁澤　榮一

額の左半分の渋沢栄一の解説を活字にしたものです。養育院本院碑の『養育院本院』の文字は、この書の字体を写したものです。

福澤諭吉の養育院？

宮本孝一
（老年学情報センター）

櫻園通信 25.
平成 27 年 6 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

ペリー来航から西洋諸国の外圧が本格化し、幕政が混乱。それから明治維新に至る約十五年間は幕末と呼ばれています。

幕末期では、西洋諸国に関する情報収集が緊急の課題となり、西洋式の軍事・医療などの研究・教育が盛んになります。

この時期、西洋情報の収集にたずさわっていた幕臣大久保忠寛は、洋式の救貧施設を江戸に作るプランをまとめて、幕府で建議しました。このプランは実現しませんでしたが、明治にはいって東京府知事に就任した大久保忠寛（一翁）は、営繕会議所に働きかけ、貧民があふれる東京に救貧施設「養育院」を作ります。

さて、この「養育院」という名称はどこからきたのでしょうか？

幕末期の西洋の医療・福祉施設情報（病院・貧院・幼院など）の中で「養育院」という施設名を書き記した文書がひとつありました。

洋学者福澤諭吉のヨーロッパ見聞録「西航記」です。

福沢諭吉

大久保忠寛
（＝　一翁）

黒船来航

目付・海防掛
（外国に対する政策の立案）

洋式救貧施設の知識

蕃書調所頭取（西洋情報の収集、洋学教育、外交折衝）

幼院　病院

西洋式の救貧施設「病幼院」設置を幕府に建議。
実現せず。

蘭学塾「適塾」の塾頭に。

藩命により江戸に蘭学塾を開校。英学を独学。

幕政の混乱で解任。
失脚。

使節団に随行。アメリカへ。

幕政復帰。蕃書調所頭取、外国奉行を歴任。

使節団に随行。ヨーロッパへ。

洋式救貧施設の知識

西航記…
病院　養老院　養幼院　養唖院　養癲院　養育院

大政奉還論、大開国論を唱え免職。
自宅謹慎。

「西航記」執筆。洋学者たちの間で読まれる。

洋式救貧施設の知識

西洋事情…
病院　貧院　唖院　盲院　癲院　痴児院

「西洋事情」刊行。

自宅謹慎中、隠居を願い出て、「大久保一翁」と改名。

英学塾「慶應義塾」開校。

明治維新

再び幕政へ。会計総裁に。大政奉還後の幕府内の事態収拾を命じられる。勝海舟とともに江戸開城。

幕府崩壊による江戸市中経済の破綻で東京は貧民があふれる事態に。

徳川家達に従って静岡に移住。

「慶應義塾」三田に移転。

東京府知事就任。
営繕会議所に救貧策の実施を働きかけて、営繕会議所附養育院設立。

「学問のすすめ」刊行。

地方独立行政法人
東京都健康長寿医療センター

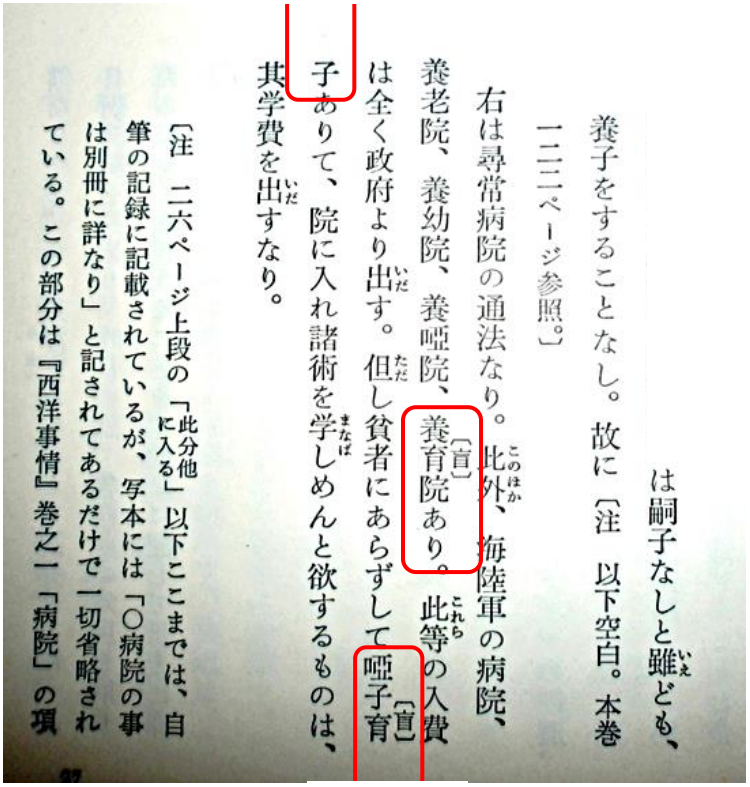
「西航記」は活字化されています。これをみると、養唖院につづけて「養育院あり」と書かれています。本書の「西航記」で養育院の文字が出てくるのはここだけです。

ここで奇妙なことに気づきます。「育」の字の横に「盲」が付記されています。

同様に、「唖子育子」という言葉にも「盲」が付記されています。

「唖子育子」では意味が分かりませんから、ここは「唖子・盲子」であると考えられます。

そうすると、先の「養育院」も、「養唖院、養盲院」と書いたのでは？　ということになります。



は嗣子なしと雖ども、養子をすることなし。故に〔注　以下空白。本巻一二二ページ参照。〕

右は尋常病院の通法なり。此外、海陸軍の病院、養老院、養幼院、養唖院、養育院〔盲〕あり。此等の入費は全く政府より出す。但し貧者にあらずして唖子育〔盲〕子ありて、院に入れ諸術を学しめんと欲するものは、其学費を出すなり。

〔注　二六ページ上段の「此分他に入る」以下ここまでは、自筆の記録に記載されているが、写本には「〇病院の事は別冊に詳なり」と記されてあるだけで一切省略されている。この部分は『西洋事情』巻之一「病院」の項

ここでは「養育院」がいかなる施設なのか、なにも記されていません。

福澤諭吉の自筆「西航記」には、貧民対象の医療・教育・福祉施設に関して解説する紙片がはさまれていて、それも、活字化されて本書に収録されています。

それによると、「養育院」の記述はなく、かわりに「養盲院」が説明されています。

点字での読書指導や、計算・音楽・手工芸、就学年限などが解説されています。

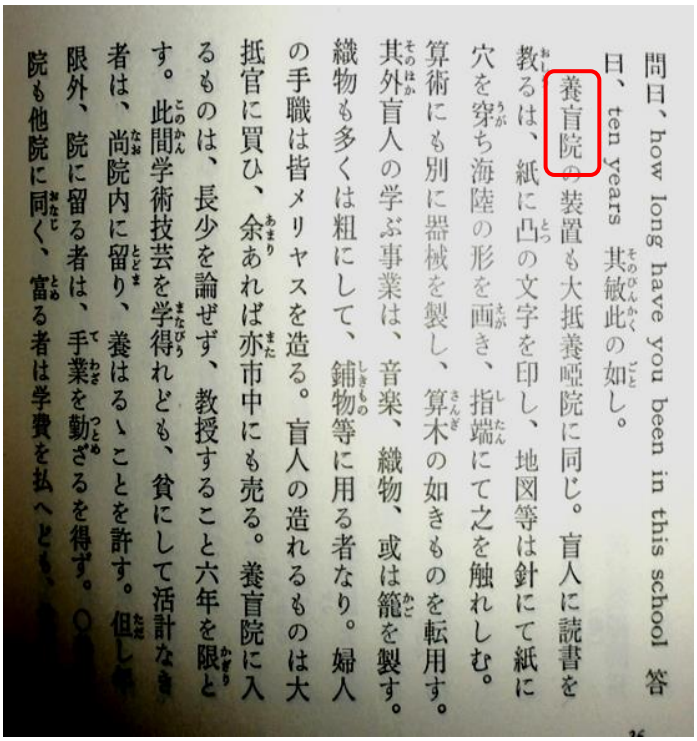
やはり、「西航記」の「養育院」は、本当は「養盲院」のようです。「養育院」や「唖子育子」に「盲」を付記しているのは、この紙片の文脈から「盲」と考えるのが妥当ということでしょう。

では、なぜ、活字版では「養育院」としているのでしょうか？

その謎を解くには、福澤諭吉自筆の「西航記」を見る必要があります。

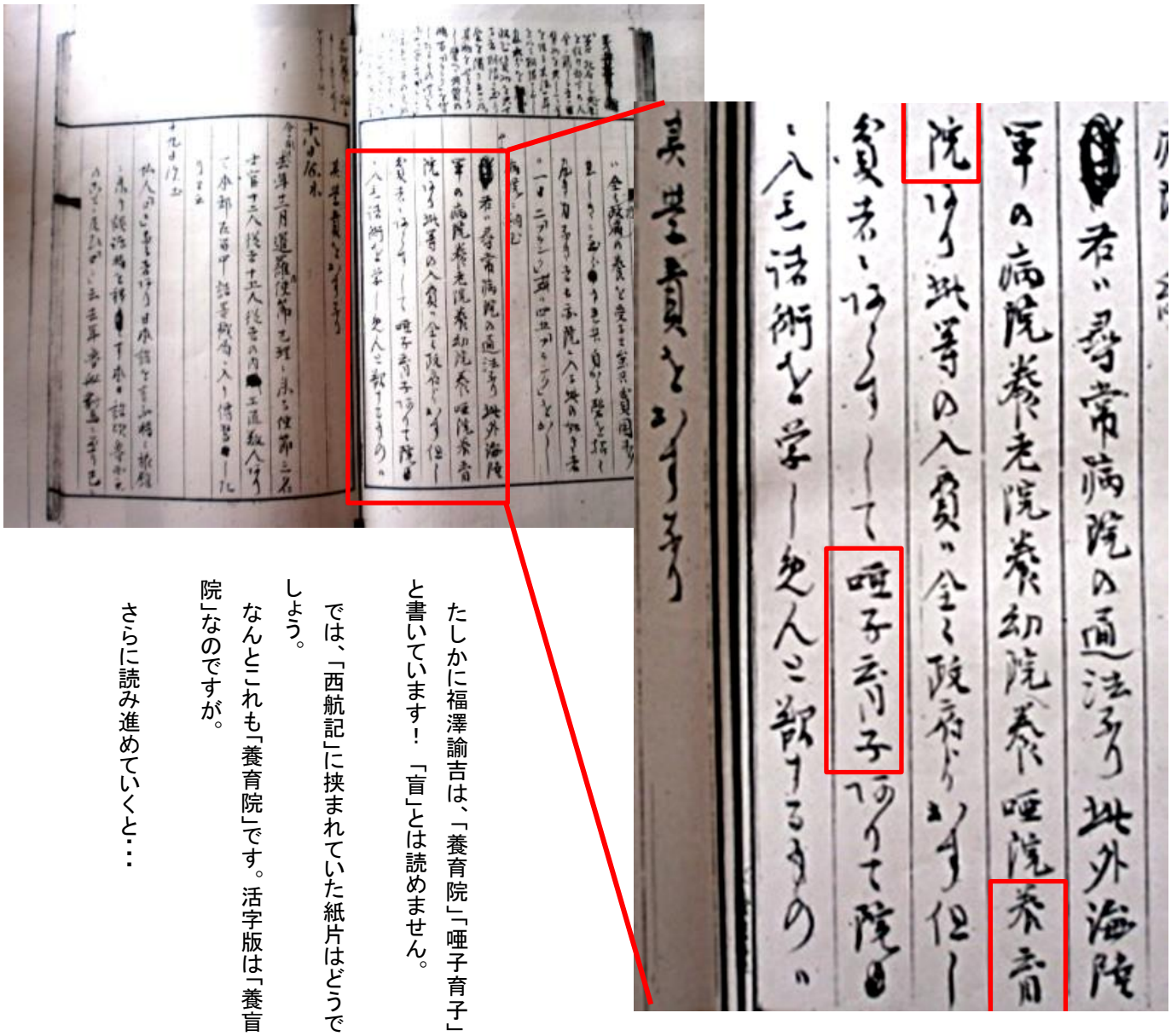
福澤の自筆文献は、マイクロフィルム化されて、慶應義塾大学の付属図書館である三田メディアセンターで所蔵していることがわかりました。

そこで、閲覧申込みの手続きをして、三田メディアセンターに出かけ、マイクロフィルムの自筆「西航記」をプリントアウトしてきました。



問曰、how long have you been in this school 答曰、ten years 其敏此の如し。

養盲院の装置も大抵養唖院に同じ。盲人に読書を教るは、紙に凸の文字を印し、地図等は針にて紙に穴を穿ち海陸の形を画き、指端にて之を触れしむ。算術にも別に器械を製し、算木の如きものを転用す。其外盲人の学ぶ事業は、音楽、織物、或は籠を製す。織物も多くは粗にして、鋪物等に用る者なり。婦人の手職は皆メリヤスを造る。盲人の造れるものは大抵官に買ひ、余あれば亦市中にも売る。養盲院に入るものは、長少を論ぜず、教授すること六年を限とす。此間学術技芸を学得れども、貧にして活計なき者は、尚院内に留り、養はるゝことを許す。但し年限外、院に留る者は、手業を勤ざるを得ず。〇病院も他院に同く、富る者は学費を払へども、

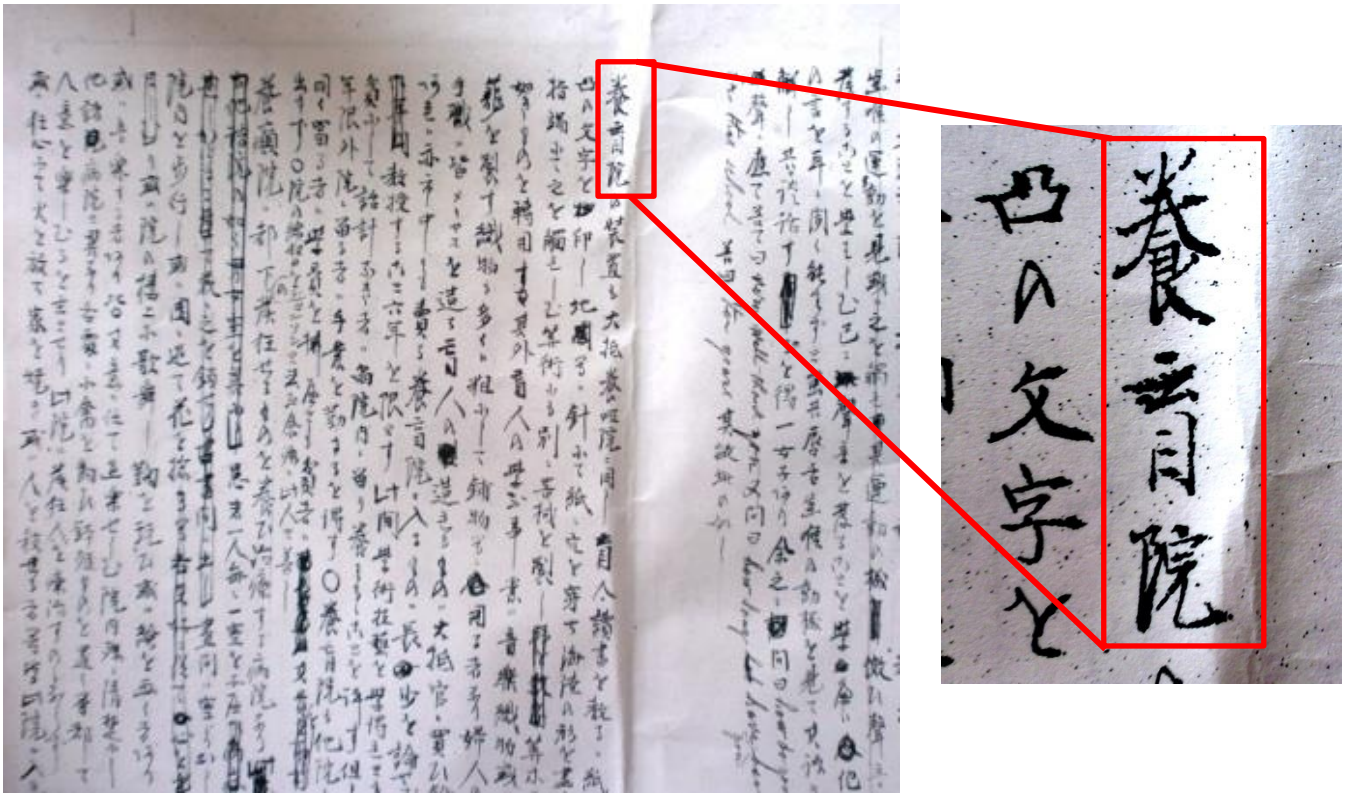


たしかに福澤諭吉は、「養育院」「唖子育子」と書いています！「盲」とは読めません。

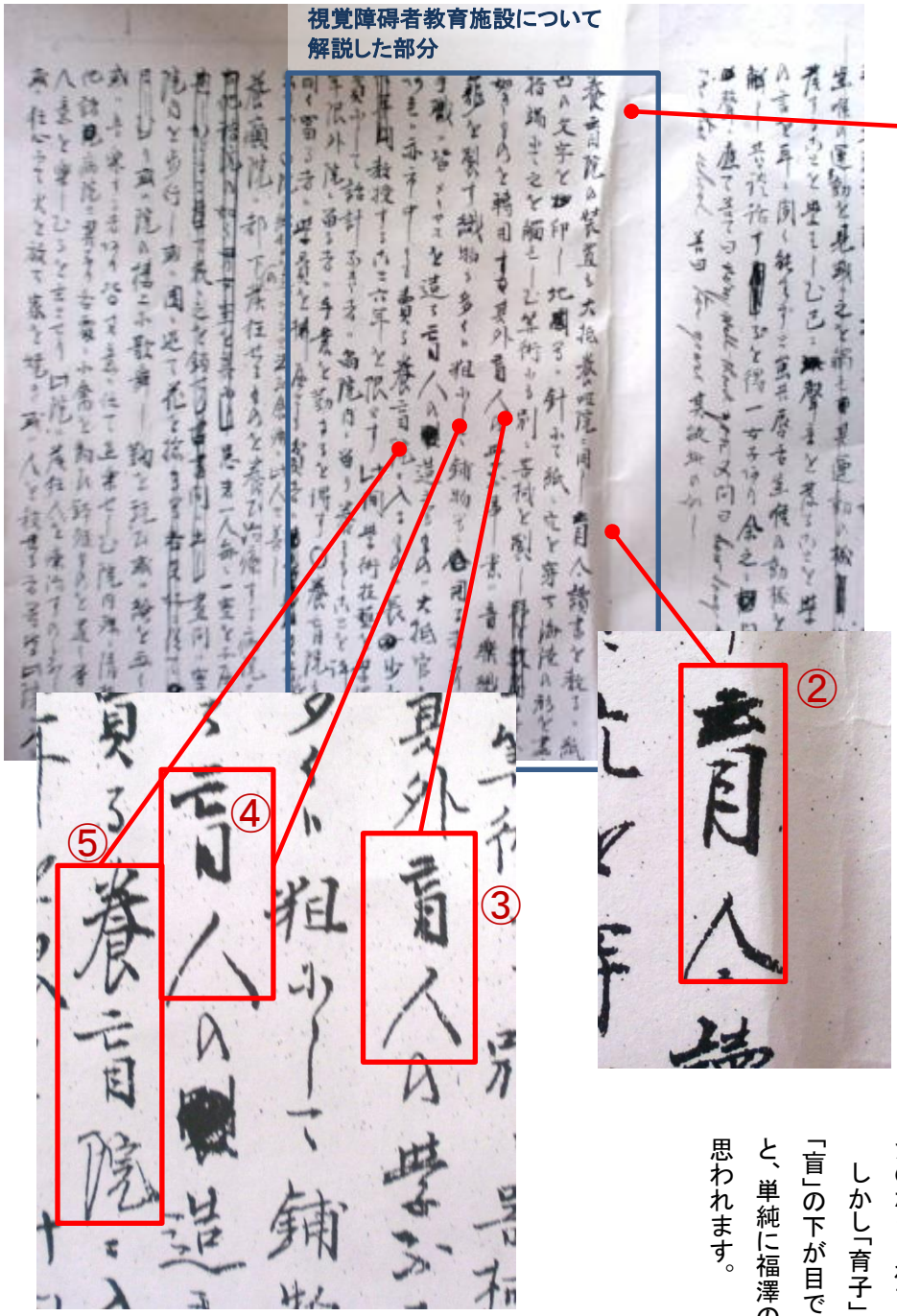
では、「西航記」に挟まれていた紙片はどうでしょう。

なんとこれも「養育院」です。活字版は「養盲院」なのですが。

さらに読み進めていくと・・・



視覚障碍者教育施設について
解説した部分



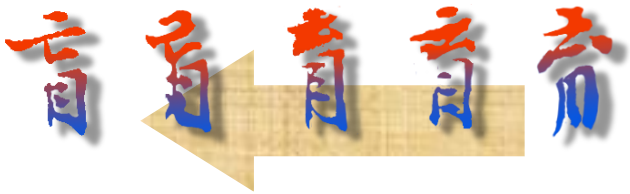
活字版の「養盲院」記述と同じ範囲で、①②の「育」の字が、③以降は「盲」に変わっています。①の「育」も、よく見ると字形が不自然です。三・四画目の「ム」の左側に墨を書き足したように見えます。まるで「育」を「盲」の字形に近づけるかのように。

推測の域を出ませんが、福澤諭吉は、「盲」の字を誤って「育」と書いていたのではないでしょうか。

この紙片を書き進めているときに、なにかのきっかけで、正しくは「盲」だと分かり、③以降から明瞭な楷書で「盲」と書き始めた。墨字は消せませんから、先に書いた「育」には少し墨を書き足して「盲」の字形に近づけた。最初に書いた本文の「育」は・・・これは墨を書き足す程度で修正するのは難しいように思います。

ヨーロッパの施設名を和名表記する際に福澤が他の日本語文献を参照して、盲・育を見間違え、書きながら「育ではなく盲だ」と気づいたのかもしれません。

しかし「育子」「育人」と書いているところや、「盲」の下が目ではなく月であるところを見ると、単純に福澤の誤字であった可能性が高いと思われます。



福澤諭吉
自筆表記の変化

大久保一翁(忠寛)は福澤諭吉と親交が深かったといわれています。森有礼が明治八年に商法講習所(現　一橋大学)開設で苦労した時には、渋沢栄一とともに、大久保一翁や福澤諭吉が援助をしていますし、明治十年に慶應義塾が財政難になった際には、福澤諭吉は大久保一翁や勝海舟に相談し徳川家に資金援助を申し入れています。

養育院設立のキーパーソン大久保一翁が福澤諭吉の「西航記」を読んでいたかどうかはわかりません。また、養育院命名の経緯についての記録も残っていません。

しかし、明治の救貧施設の命名に、福澤諭吉記述の「養育院」が参考にされたかもしれず、それが諭吉の誤字だったとしたら、激動の幕末期に源流をもつ養育院史の、ユニークな歴史こぼれ話ということになりそうです。

櫻園通信

櫻園通信 26.
平成 27 年 7 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

養育院と谷中 前編 谷中の大久保一翁

坂部明浩（谷中在住，養育院・渋沢記念コーナーボランティア，介助＆文筆業）

東京の下町、台東区谷中（やなか）というと、本通信十六号でも紹介されているが、了倪（ごん）寺に、養育院で明治～大正初期に亡くなった引き取り手のない無縁仏のお墓があり、いまも手厚く管理されている。

了倪（ごん）寺の
東京都養育院慰霊碑

今回、その谷中にさらなる発見があった。舞台は江戸時代に遡る。

文久二年、谷中の地（了倪寺より七、八分の一乗寺隣）で、大久保一翁（当時は大久保越中守）が近藤七郎右衛門の屋敷を授受したという記録が残っていたのだ（『東京市史稿（市街篇四六）』）。

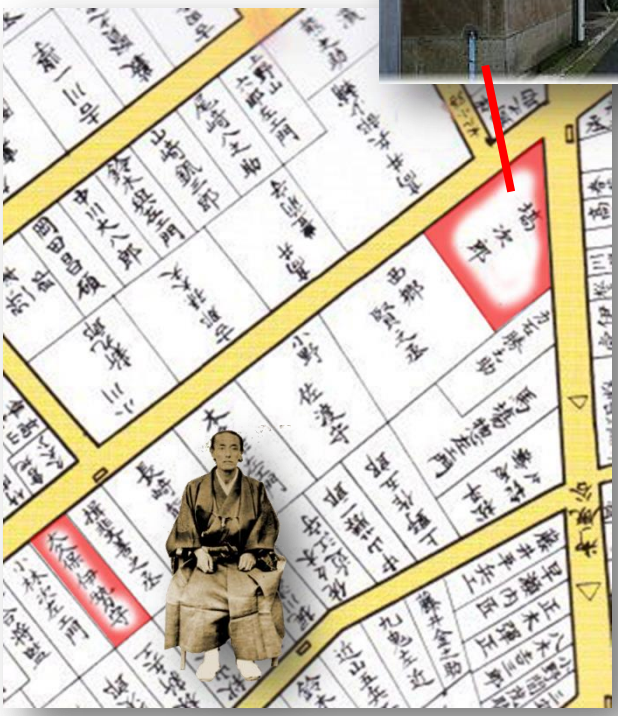
暗殺現場である塙次郎邸跡前
（東京都千代田区九段）

養育院を創った、のちの
東京府知事 大久保一翁

もちろん、この記録をもって即、よく知られている番町（東京）の大久保一翁邸から本格的にこちらに引っ越したかどうかは分からない。

また、その年は幕臣の大久保一翁にとっても浮き沈みの激しい年で十一月には左遷もあった。

が、一方で、この時期には、文久二年十二月に盲目の国学者塙保己一の息子で、国学者の塙次郎が尊王攘夷派によって自宅前で暗殺されている。



東都番町大繪図（安政 5）
塙次郎(=塙忠宝 はなわただとみ)と
大久保一翁（伊勢守）の屋敷

それが番町の大久保一翁の屋敷と同じ並びの数軒ほどの距離。

その意味では一翁は左遷されたとはいえ、身の安全を考え、谷中の地に移住した可能性も大いにあろう。

どんな状況にあっても、大政奉還論の先駆けになる提案をするなど、つねに先見の明をもつ大久保一翁にあってみれば、谷中の地でも頭脳はフル回転。江戸城明け渡しを早々に考え、その混乱後の「江戸」に行倒れの者などが増えることも想定されたであろうし、その受け皿として、後の養育院の場所の候補を、江戸の頃から構想していたと考えることもあながちあり得ないことではなさそうだ。

不忍池

ちなみに、この谷中の大久保一翁の屋敷(現・谷中一丁目)から、上野時代の養育院(護国院)までは歩いて五分の距離である。

小石川谷中本郷繪図(萬延 2)
真ん中より右の「上ノ」とある辺りが文久 2 年になって、大久保一翁の屋敷となった。真ん中下の「上野山内」表示の辺りが「護国院」。

■本稿は『江戸切絵図を歩く』の中の菊地明氏の論考「土方歳三の運命を決した道」と直接の助言を谷中の大久保一翁についての執筆の端緒とした。感謝したい。

櫻園通信

櫻園通信 27.
平成 27 年 7 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

養育院と谷中 後編 番町で“目”を瞠(みは)る？

坂部明浩（谷中在住，養育院・渋沢記念コーナーボランティア，介助＆文筆業 ）

国学者・塙次郎の暗殺については、もう一つ見落とせない事実がある。

それは生前、外国船が頻繁に訪れるようになり、小笠原の領有を確固たるものにするため、幕府は塙保己一が集めてきた過去の文書の中で証拠となるような文書を、保己一のあとを継いだ塙次郎に探させていたことである。

国学者
塙保己一

暗殺の前年（文久元年）には、大久保一翁も一年ほど外国奉行、小笠原島開拓事務江戸取扱いであったことからも、二代にわたる国学者に小笠原のことを調べさせたのは、一翁自身の指示であった可能性が高い。

大久保一翁の盲目の塙保己一への敬意、そして尊王攘夷派への憤り、いかばかりか。

塙保己一のことをうたった川柳「番町で目あき目くらに道をきき」を思ったことだろう。道は学問を指す。目あきでも「見えて」いない者が、暗殺を企てる？

しかも肝心な、その塙次郎を襲った側の人物が、長州藩の伊藤博文と山尾庸三だったのだ。

松下村塾で学び、尊王攘夷運動に参加。薩長政権で力を伸ばす。
初代内閣総理大臣
伊藤博文

ただ当時は犯人は分からず、なんと六十年後の一九二一年、塙検校百年祭の席上、保己一の顕彰団体の温故学会を代表して渋沢栄一が挨拶した際、その暗殺事件に触れ、突然暗殺者の名前を明らかにし、参列者を驚かせたと言われる（『素顔の塙保己一』堺正一）。

もっとも、一翁には犯人名を渋沢栄一は早くから伝えていたはず。

ところが、ここにも歴史の不思議がある。

この山尾庸三と言う人は、文久三年には伊藤博文と一緒に英国に行き、造船所で障害者が働いている姿に強い印象をもち、帰国後、明治四年には（工学頭になっていたが）盲唖教育に関する建白書を政府に出すのであった。

明治維新後、工学関連の重職を歴任。のちの東京大学工学部の前身となる工学寮を創立。

日本工学の父
山尾庸三

番町で「見えなかった」道を新しい時代に瞠目し開こうとしたのである。

その後、養育院が出来てのち、じつは明治八年には、津田仙や中村正直や古川正雄らによって訓盲院設立願い（養育院の盲人室からの独り立ち？）が大久保一翁府知事に出され、一翁は会議所に審議を委託する。（会議所側の回答では訓盲院を養育院の附属にしようとしたようだ）

東京府知事
大久保一翁

こうした中で東京日々新聞は中村正直の話を載せる。中村は、明治四年の山尾庸三の建白書のことなどを挙げて訓盲院認可を促すコメントを残したのだ。

大久保一翁も府知事として（知人でもある）中村正直のコメントを読んだとすると、あの（暗殺者）「山尾庸三」の建白のことに触れた箇所を読んでなんと思ったことだろう。

盲人のもつ記憶力や収集力（塙保己一）によって小笠原の問題が助けられたのに、その盲人の子ども（塙次郎）を暗殺しておきながら、よくもまあ、盲唖の建白もあったものではない、と一翁は思ったか。いや、それよりも、山尾庸三の苦悩を一翁は読み取ってその先を考えていたか・・・それは分からないが、この養育院と訓盲院設立こそ、“目”まぐるしい江戸から明治への道しるべであったと私には思えてならない。（次の楠本府知事の時代に認可された訓盲院の母体、楽善会に山尾庸三も明治九年に入会している。）

楽善会訓盲院 （築地）

■訓盲院と山尾庸三については、『わが国特殊教育の成立』（中野善達・加藤康昭）を参照。

櫻園通信 第28号

櫻園通信 28.
平成 27 年 10 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

出会い

大久保一翁（忠寛）　　渋沢栄一

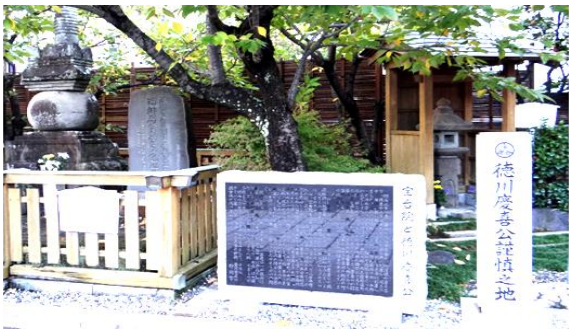
養育院を創設した大久保一翁と、それを引き継ぎ、半世紀以上にわたってその維持発展に尽力した渋沢栄一の、初めての出会いについて述べて見たい。

大久保一翁と渋沢栄一　大久保忠寛が『病院幼院設立意見』を、蕃書調所総裁として幕閣に提出したのは、安政４年（1857）41 歳の時である。黒船来航後、幕府の海防掛に抜擢され、貿易取調御用、蕃書調所総裁の立場で作ったものである。その後、直言居士の大久保は、昇任と左遷を繰り返しながら、長崎奉行（辞退）、駿府奉行、禁裏付、京都東町奉行、御側御用取次、勘定奉行（５日間）などを勤め、幕末には隠居の立場ながら（隠居名一翁）、会計総裁・若年寄として、勝海舟とともに江戸の無血開城を果たした。

維新後は、静岡藩の中老として、徳川家の移封に中心的な役割を果たした。幼い家達を後継者とし、謹慎中の慶喜家の家令の立場で、徳川家の代替わりを果たし、家臣団のための沼津兵学校、静岡学問所、駿府藩立病院の旗揚げなどに重要な役割を果たしている。

一方、安政４年頃の渋沢栄一は、秩父の豪農の倅で、血気にはやって尊皇攘夷運動に手を染め、心配した親が嫁を持たせた 17 歳の若者である。縁あって一橋家に仕えて武士身分を得、慶喜が将軍になるに及んで、26 歳の時には幕臣となり、慶喜の命で徳川昭武の幕府使節団の庶務掛として、1867～1868 年にパリを中心に、ヨーロッパ生活を体験することになる。

しかし、この間に徳川幕府は崩壊し、急遽帰国、1868 年 12 月 8 日に、徳川慶喜の謹慎する静岡に帰国報告に訪れることになる。此の場面は渋沢に自伝にしばしば述べるところである、慶喜が謹慎する駿府の宝台院の一室においてのことである。



徳川慶喜謹慎の寺、宝台院　駿府の宝台院は、徳川家康の側室、秀忠の生母である愛姫の葬られる徳川家には由緒の深い大寺で、国宝の伽藍を有した。かつて駿府町奉行を経験している大久保一翁はこの寺を慶喜の謹慎の寺に選んでいる。この間の事情が、石碑に書いてあるが、維新後、勝海舟や渋沢栄一がしばしば訪れたと言われる。

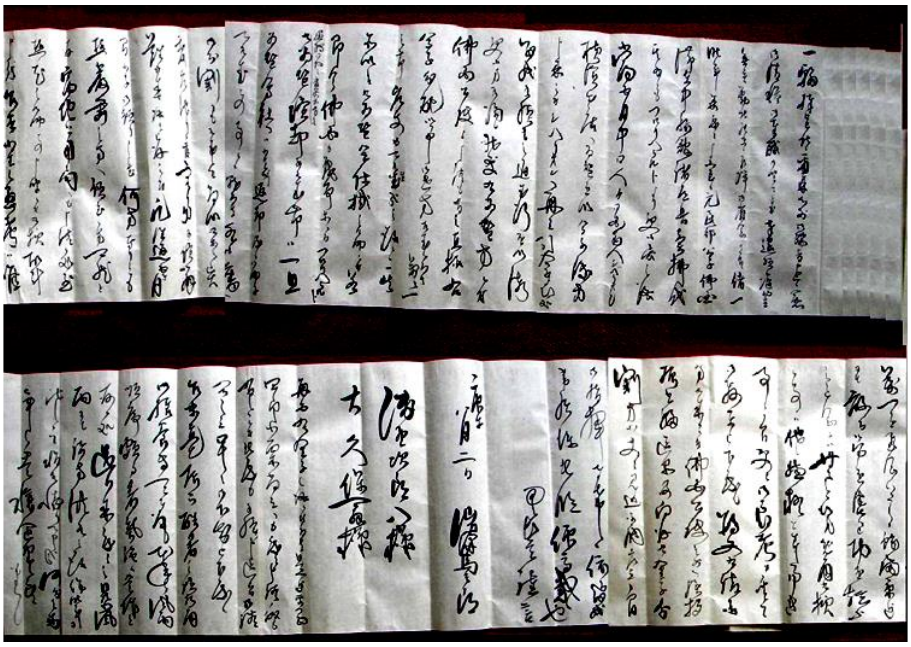
昭和 15 年の静岡大火で旧国宝の本堂を失い、さらに昭和 20 年の空襲で壊滅した。現在は鉄筋コンクリート造りの寺となっている。

大久保一翁と渋沢栄一の接点　明治元年にパリから帰朝した渋沢は、当初、慶喜に報告後、昭武のいる水戸に赴くつもりであったが、慶喜の配慮で静岡に留まり、

勘定頭支配同組頭格御勝手懸り中老手附ということになった。

このころ渋沢（篤三郎と名乗っている）が、大久保一翁・浅野次郎八に宛てた手紙が、大久保家の御子孫の家に残されている。

渋沢の流麗な筆で、パリ生活の過程で、幕府からの拝借金を運用して得た残金の処理方法について意見を求めた手紙である。詳細は次号で述べる。



当時、幕府からの使節団や留学生の、幕府からの拝領金の処理はかなりルーズであったと言われるが、渋沢のヨーロッパでの業務・会計報告の公正さは括目すべき内容であったらしい。大久保が渋沢を高く評価するきっかけとなったと思われる。

このあと大久保は、幕府から静岡藩に貸与された巨額の太政官札の運用を渋沢に任せることになる。

渋沢は、これにパリでの残金、静岡の豪商の投資などを合わせて、商法会所を立ち上げることになるが、総額の 88%は太政官札である。このように資本をあわせて（合本して）会社組織を運営したことから、これは日本最初の株式会社組織との考えがある。

かつて光岡八郎（後の由利公正）が福井藩で藩札を用いた商法会所の運営で大きな利を上げ、福井藩の財政を立て直し、藩主松平春嶽の幕末の政治活動の元となった。財政問題を抱えた明治新政府は、由利公正を財務担当とし、その手法を全国的展開したのが太政官札の発行である。しかし、信用の低下から正金への交換があちこちで行われ、その価値の維持のため、正金への交換が禁じられた。

渋沢は静岡で、太政官札の運用による「商法会所」の商業活動などで大きな利益を得たが、中央政府（由利公正）からのクレームがあり、大久保の提案で「商法会所」は「常平倉」に名を改めている。

渋沢栄一の上京　大久保忠寛は将軍家茂の御側御用の時、「日本は開国すべきで、朝廷がこれに反対するのなら、委任されている大政を奉還し、国是は諸侯の会議で決めるべき」と主張し、松平春嶽や山内容堂の度肝を抜き、慶喜、板倉勝静らには左遷された。

その 5 年後に徳川慶喜自身が大政奉還することになる。その後は慶喜を中心に、有力諸侯の松平春嶽、伊達宗城、山之内容堂、島津斉彬・久光らによる合議制、公武合体路線を想定しているのであり、維新政府が成立したとき、松平春嶽、伊達宗城らは、政府高官となっている。

明治 2 年段階で、松平春嶽ついで伊達宗城は、大蔵・内務卿の立場にあるが、これらの人は幕末から大久保一翁と親しく交わっている人であり、新政府に幕府の人材を生かそうとしてきた人である。しかしその後は、薩長閥中心の政権運営となり、表舞台から去ってゆくことになる。

渋沢栄一が明治政府に任官する過程は興味深い。

上京を命ぜられたとき拒否したが、「徳川家は人材の出し惜しみをしている」といわれては、慶喜に迷惑がかかると大久保一翁に説得されて上京している。

また上京後、大隈重信に「国家創業の八百万の神のひとりたれ」と説得され、明治政府の大蔵省に任官することになり、改正掛（シンクタンク）として維新政府の運営に貢献してゆくことになる。渋沢の明治政府への任官には、このような背景があるようである。

また後に大久保一翁が東京府知事のとき、共有金（江戸幕府からの七分積金）の運用、養育院の運営を渋沢栄一に託したのも、このような二人の信頼関係に基づくものであったろう。　〔稲松孝思〕

櫻園通信 29.
平成 28 年 1 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

渋沢栄一から大久保一翁への手紙

渋沢栄一の若い頃からの代表的な社会的貢献事業として『養育院』関係のものがしばしば上げられる。しかし、その設立に関しては、渋沢自身はその講演の中で関与を否定している。

これらの事業は大久保一翁が明治五-七年の東京府知事の時代に、共有金（江戸期の救貧資金である**七分積金**の名前を変えたもの）を原資としてなされたものであり、幕府目付け時代から暖めていた構想の実現である。

また、『商法講習所』は、森有礼、ホイットニーの構想によるものであり、その破綻を防ぐために大久保府知事が共有金をあてたものであり、当初このことにも渋沢は反対している。しかし、大久保一翁東京府知事が、共有金（七分積金）の運用を渋沢に委託したことから、渋沢はこれらの社会事業に関与するようになる。

渋沢の関与は、大蔵大輔・井上馨の内諭により、本来、江戸の救貧対策基金である七分積金の名を「共有金」に改め、町会所の運用を東京の新興財閥などによりなる営繕会議所に託し、財政難の折、東京のインフラ整備やガス灯街路設置にも使用できるようにしたことにある。

これに対して、救貧策はどうするのですかと大久保知事により諮問が出され、その答申の「救貧三策」を具体化するものとして、明治五年に**養育院**は設立されたのである。

この関係は、静岡藩に割り当てられた太政官札の運用を渋沢に託し、これをもとに静岡の商法会所を立あげて成功させた先例にさかのぼる。

その信頼の醸成に、以下に挙げる手紙がある。二人の絆のきっかけとなった、若いパリ帰りの渋沢と、静岡の徳川藩の中枢を支える大久保の二人をつなぐ手紙がこれである。

手紙の背景：大久保忠寛（一翁）　1817～

鳥羽伏見戦争後、徳川慶喜は江戸に戻り、恭順体制のための組閣を行い、会計総裁に大久保一翁、陸軍総裁に勝海舟、海軍総裁に和田堀を当て、江戸幕府の幕引きにあてた。この時老中は不在で、大久保は本来大名の職である若年寄・参政に引き上げられており、幕府の政権移管時の実務担当最高責任者である。

この後、静岡における徳川藩（家達）の移封に働き、家臣団による沼津兵学校、静岡学問所、駿府藩立病院などを立ち上げに奔走。旧藩士救済に茶生産の基礎を作っている。また、慶喜家の家令を努めているが、この時（明治元年（1870）12 月）に渋沢が訪れるのである。

明治 3 年静岡藩権大参事　更に廃藩置県により、静岡県家達と共に東京に戻っている。なお、明治 3 年に明治政府参議を要請されたが辞退。

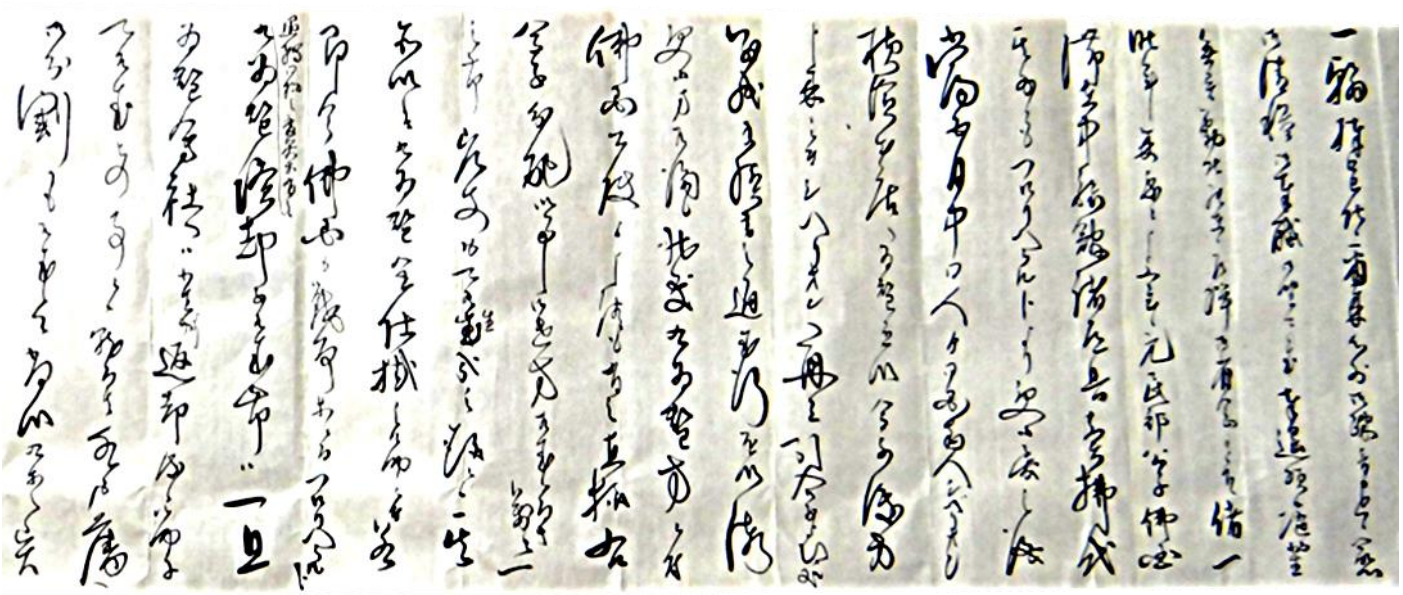
手紙の背景：渋沢栄一　1840～

埼玉の豪農の跡継ぎであったが、政治運動に関わり、縁あって一ツ橋藩に仕官し、武士身分を得た。慶喜が徳川将軍になるに及んで、図らずも幕臣となる。徳川昭武を首班とするパリ万博派遣団、万博後の昭武のヨーロッパ巡検、パリ留学の庶務、会計担当官として働く。

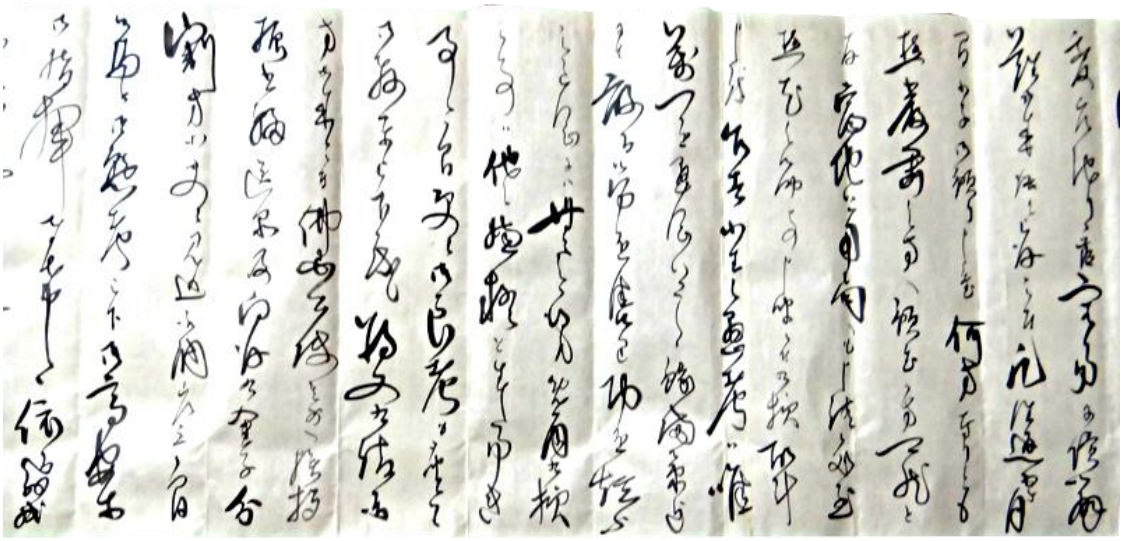
幕府崩壊により、徳川昭武と共に帰国し、その報告に静岡で謹慎中の徳川慶喜を訪れる。家令の大久保が間に立つが、このときが二人の始めての出会いである。

渋沢は、静岡の慶喜の下にあることを希望し、ヨーロッパでの幕府預かり金の運用で得た資金の使い道を担当者に相談するが埒が明かず、静岡藩の要路の浅野次郎八、大久保一翁に当てたのがこの手紙である。

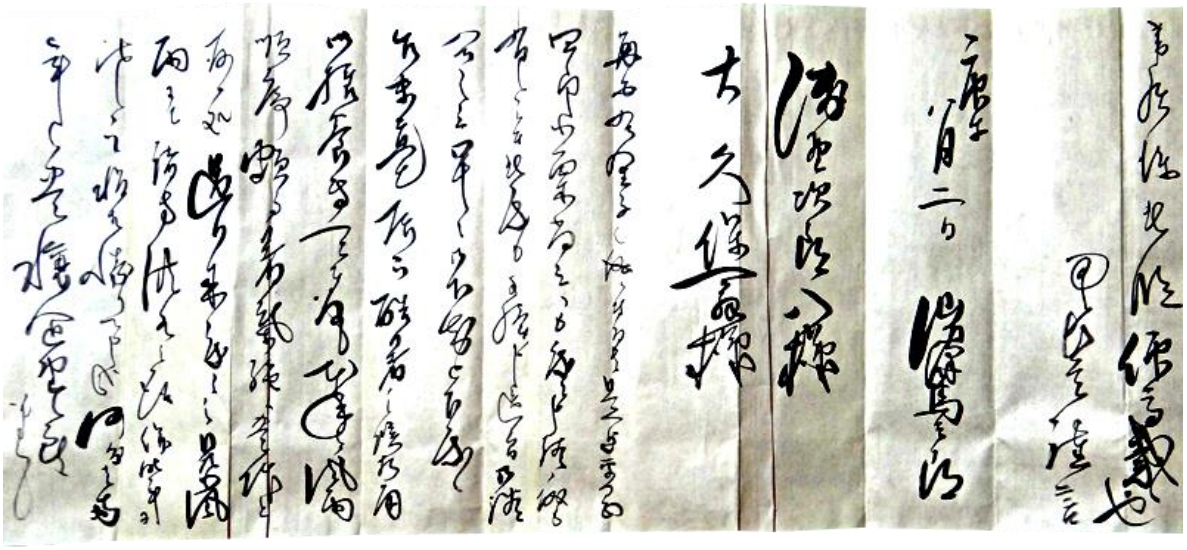
大久保がその公正さに渋沢を高く評価する気かけになったと思われる。なおこのころ栄一は篤三郎を名乗っている。



渋沢栄一（27 歳）
1867 年　パリで撮影



大久保一翁
（50-51 歳？）
1868 年頃



西木氏（東京都公文書館）による解読

一翰俸呈仕候、爾来以外御疎音申上候、愈
御清穆御奉職御坐被成奉遙賀候、蘆笙
無異勤仕罷在候、乍憚御省念可被下候、偖一
昨年来度々申上置候元民部公子仏国
滞在中旅館諸道具売払代
其外ニもフロリヘラルトより受取戻之儀
当五月中同人より同国商人シベリオン
横浜本店へ為替を以金子渡方
申来候ニ付、シヘリオンへ再々引合およひ候処
別紙手続書之通成行を以漸
受取方相済候、此度右為替方ニ付
仏国公使より申談も有之、直様右
金子分配いたし御遣方相成候ては万々一
之節差支も可相生哉之趣ニ候、其
所以は右為替金仕掛之筋ニ付、若
即今仏国も戦争等ニ付フロリヘラルト
退転御帰之変異等有之、右為替債却可相成節ハ一旦
為替会社へハ小生より返却致候筋に
可相成との事ニ候、就ては水戸藩へ
御分割ニも相成候ハヽ尚以右等之異
変差起り候節容易に債解
難相成儀ニ被存候ニ付、凡往返五ヶ月
間小子御預り申置、何方なりとも
極厳粛之方へ預置候方可然と
存、當地御用局へも申談候処至
極尤之筋との申聞ニ付、右様取計
申度、乍去小生之愚考ハ唯
万一を懸念いたし候予備策迄
にて、敢て労を焦り功を競ふ
之意念ニハ無之候得共、兎角右様
之事ハ他之嫌疑を生し易き
事ニ候間、更ニ御良考も御坐候ハヽ、
御教示被下度候、将又右請取
方相成候ニ付仏国公使其外へ挨拶、
振出輸送品及向後右金子分
割方ハ夫々見込取調差上候間
篤と御懇考被下御高案
御指揮奉希候、依て別紙
書類添此段仰高裁候也、
匆々頓首謹言

庚午八月二日　　渋澤篤三郎

浅野次郎八様
大久保一翁様

再白、右金子之儀ニ付ては是迄平岡
四郎小栗尚三へも度々申談ノ儀も
有之候ニ付、此度も手続申送候間御談
合之上早々御下知被下度候、
乍末毫辰下酷暑之候折角
御摂養専一ニ奉存候、本年之風雨
順序頗る暑気強く豊作と
存候処、過日来度々之暴風
雨にて諸方洪水之趣、併昨年に
比し候ハヽ稍相悖り可申哉、何分は当
年之豊穣企望之至ニ御坐候、

渋沢栄一と大久保一翁間の手紙

渋沢栄一と大久保一翁との関係を考えると、相当のやり取りが想定されるが。それを求めて、大久保一翁の直系のご子孫を訪ねた。

見せていただいた多くの資料の中に、3 通の渋沢の手紙を見出した。その一つがこの書状である。もう1通は営繕会議所の始末にかかわる、他の1通は抄紙会社にアメリカ人技師を雇い入れる際の許可をもとめたものである。

これらは、写真に収められ、東京都公文書館で閲覧可能な状態にしていただいた。

また判読困難な文字を、公文書館の西木氏に読んでいただいた。

元の手紙、西木氏により活字化したもの、これを現代文に稲松が意訳したものを掲げた、三種を比較していただきたい。

逆に大久保が渋沢にあてたものが想定されるが、渋沢は徳川家関係の大量の資料を兜町の旧邸宅に集めていたものに含まれていた可能性が高い。

しかし、これらは、関東大震災の時に灰燼に帰しており、残念なことである。

大久保家文書

大久保家の直系ご子孫のもとにいくkつかの文書が残されていた。令心形刀令流目録、辞令類、家譜、大総督府から江戸の治安維持を依頼する沙汰書、松平春嶽・横井小楠・中根雪江・大久保利通・川路利・福沢諭吉らの書簡、木戸孝允あての手紙の写し、勝海舟の軸、薩英戦闘図、ハリスの登城図、個人的なメモなど・・・これらの写真は東京都公文書館で閲覧可能な状態になった。

大久保一翁の関係文書

大久保一翁関係の文書には、亡くなったときに勝海舟が集め私家版の歌集として発行した「櫻園集」、国立図書館に収められているもの、海舟全集に収められているもの、松平春嶽関係の文書、松坂の射和文庫所蔵のものなどが現存している。他にもある筈であるが未見である。

江戸時代のものは、江戸開城時、関係者に累が及ぶことを危惧して、一翁自身が多数焼却したと伝えられている。

（超現代語訳　稲松）

ご無沙汰いたしておりますが、不躾ながら、お手紙を差し上げます。ますますお元気に、ご公務に励んでいるようにお見受けし、喜ばしい限りです。

小生は相も変らぬ様子ですが、はばかりながら、お考えいただきたいことがあります。

一昨年から度々申上げてきました、元民部公子がフランスに滞在中の宿舎の道具の売却代金、その外に、フロリヘラルドから受け取った戻し金（配当金）は、五月中にフランス商人シヘリオンの横浜本店に為替で振り込まれております。

シヘリオンにたびたび問い合わせ、別紙の手続き書のように暫定的に受け取りました。

この度フランス公使も言ってきていますように、お金の分配に万一差し支えがあるかもしれません。その訳は、若し今フランスが戦争をすることになると、フロリヘラルトは帰国してしまい、この為替の仕組みからいって、この為替の扱いが一旦為替会社に返してしまう事になります。

ついては、このような異変が起こってしまい、簡単には現金化しにくくなり、水戸藩に分割することが難しくなるように思います。

そのため約五ヶ月間私が現金化して預かり、その後に、何れかの最善の割合で配分したほうがよいのではないでしょうか。

当地静岡の担当局に申し入れましたところ、それも尤もだということで、このように取り扱いたいと思います。

しかし、私の愚考するところに寄れば、万が一のことを心配して、予備の方法としてこのようにいたしました。あえて、面倒を避けてさっさとけりをつけたいわけでは在りません。

兎角このようなことは、あれこれ他人からの嫌疑を受けやすいので、もっとよい考えがあれば、お教えください。

また、受け取ってしまっておりますので、フランス公使などへの挨拶、送られてきた輸送品や、右の金子の分割方法の見込みを提案いたします。

そのための書類を添付いたしますので、ご判断ください。恐れながら申し上げる次第です。

庚午（明治三年）八月二日　　渋沢篤三郎（栄一）

浅野次郎八様（家老）

大久保一翁様（中老）

追伸

このお金のことについては、これまで、平岡四郎、小栗尚三にも度々申しいれてきましたので、相談のうえ、早々にご指示願います。

最後ながら、聊か酷暑の季節ですのでお体大切にしてください。今年のお天気具合は大変暑く、豊作のようです。しかし、先日来暴風雨で、あちこち洪水もあり、昨年に比べますと心配なところもあり、今年の豊饒を願っております。

当時の幕府の外国派遣団や留学生は、資金の使用が、いい加減であったが、渋沢の態度は公正無私かつ正確で、彼への信頼が一気に高まった。

当時静岡藩は、明治政府から割り当てられた50万両の太政官札の貸付金の運用法を模索していた。これに対する渋沢の商法会所立ち上げ建言が採用され、先のパリから持ち帰ったお金、豪商からの資金を合わせて（合本）して、静岡商法会所を立ち上げた、日本的な会社組織のはじめとされている。因みに、商法会所の元手となる資金の90％以上はこの太政官札である。

静岡市の宝台院にある徳川慶喜謹慎の地の碑
詳細は櫻園通信 28 号参照

櫻園通信第30号

櫻園通信 30
平成 28 年 1 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

昭和 47（1972）年頃の養育院附属病院

現在の東京都健康長寿医療センターの沿革は、明治 5 年に設立された『養育院』に遡ります。その時代ごとの社会的要請に応じて福祉・医療の役割を担ってきました。

今から40数年前の1970年頃、将来の高齢者時代を見据えた東京都の方針転換で、養育院の運営形態が大きく変わりました。

それまで養育院の施設利用者を主な対象とした養育院付属病院は、一般都民に開かれた大病院に転換し、老人総合研究所を併設、従来からの老人施設も拡充する方向になったのです。このための新病院と研究所がオープンしたのは、昭和 47（1972）年の夏前のことです。

その任に当たったのが、当時国立金沢大学の第二内科教授から養育院付属病院長に就任した村上元孝先生と、東大病理学教授から、老人総合研究所長に就任した大田邦夫先生です。

当時は大学紛争の余波で、各地の大学医学部は大きな混乱の中にありました。両先生の関係のある東大、京大、金沢大、長崎大、鹿児島大、東京医科歯科大、東北大などの医局からの派遣や、新天地を求める医療者が新施設に集まりました。当時金沢大学から参加した山之内博先生は、長く当院で神経内科の診療に当たり、10 年ほど前に当院の副院長から、大森日赤病院院長に栄転されましたが、山之内先生に当時の様子を書いていただきましたので、櫻園通信に掲載いたします。なお、「櫻園通信」表題の写真の手前の三つの建物は、現在解体工事中の、旧病院、旧研究所、旧ナーシングホーム、奥が今のセンターです。　〔稲松孝思〕

村上元孝先生

亀山正邦先生

新しい革袋には新しい酒を　－ 集まる人材 －

東京都老人医療センター（現　東京都健康長寿医療センター）元副院長　山之内博

この病院を辞めて10年の今年（2015年）の秋、私は骨折し、新装なった病院の世話になりました。見舞いに来た当時の同僚、稲松医師（現、顧問）から昔の病院のことを何か書け、当時のことを知っている人が少なくなったから、と注文されました。

私は 1972 年、新病院となった「東京都養育院付属病院」で働きはじめ、以後33年間この病院に勤務しました。当時の新しい病院の頃を思い出しながら医師のことを中心に書いて見ます。

ずっと前から、キャンパス内の特別養護老人ホーム、あるいは老人ホームの入居者を対象とした小規模の養育院付属病院はあり、内科系は東大第二内科の医師、外科は同第一外科の医師が主となって診療に携わってきました。

1960 年代の後半、当時の美濃部都知事は、東京都

昭和 47 年までの旧々養育院附属病院

民全体に開かれた老年者のための本格的な病院を造りたいとの構想をもち、今のこのキャンパス内に約 700 床の当時としては画期的な老人専門病院を建設することが決まりました。
器だけでは動きません。組織は人です。病院の場合、もちろん医師だけでやれるわけではありませんが、ポイントはどれだけ優秀な医師が集まるかにかかっています。まずはトップの人事。院長として適切な人はいないか・・・

尼子富士郎先生

杉並区に浴風会病院という関東大震災後に作られた老人専門病院が以前からあります。
当時、そこの病院長は尼子富士郎先生（尼子城主の末裔）で、この人は日本の老年医学の基礎を築いたとさえ言われた人です。

美濃部知事は小さい時からの学友だった尼子先生に相談したところ「村上元孝しかいない」と当時、金沢大学の教授だった村上先生を強く推薦されたと聞いています。もちろん、他にも相談したでしょうが、病院長は村上先生に決まりました。

余談ですが、当時、浴風会は「浴風会調査研究紀要」という雑誌を定期的に刊行しており、いま見ても立派な医学論文が多数あり、しかも報告者の多くが後に大学の教授になっています。この雑誌の横文字名は たしか Acta Gerontologica Japonica でした。

村上先生は浴風会病院でおもに脳卒中を診療、研究していた亀山正邦先生を副院長として指名しました。おそらく次の後継者候補にと意識されていたと思われます。

人材の結集

あの村上元孝先生が来るのかと新しい病院へ医長クラスの優秀な医師が集まりました。村上先生からの誘いもあったと思います。当時、大学紛争が続き、大学での生活に嫌気を感じ、新天地を求めた方もおられたでしょう。

内科系の各科の責任者（医長、部長）を見ますと、循環器科は東大第二内科から、消化器科は東北大、呼吸器科は東大第三内科、内分泌科は同第三内科、感染症科同第一内科、神経内科は同神経内科、血液科は群馬大学、精神科は東京医科歯科大学、放射線科は東大と横浜市大、研究検査部門は東大第三内科、など。そしてリハビリテーション科には久留米大学出身で長くアメリカで活躍された人が赴任しました。

外科系では、外科（消化器外科）は東大第一外科、整形外科は東大、脳神経外科は東京医科歯科大学、眼科東大、皮膚科東大、泌尿器科東大、耳鼻咽喉科日本大学、麻酔科日本医大、歯科口腔外科は東京歯科大から、と記憶しています。

医長クラスは東大が多いですが、若手の医師は全国から集まりました。新病院数年間の若手医師の出身を見ますと、北から、北大、岩手医大、東北大、福島医大、新潟大、群馬大、金沢大、筑波大、東大、東京医科歯科大、日大、慈恵医大、順天堂大、日本医大、岐阜大、京大、徳島大、広島大、九州大、長崎大、熊本大、鹿児島大、等です。自分から求めて来た人と、良い病院だからそこで研修させたいと大学から派遣された人、そして医長にくっついて来た人もいます。自分からやってきた人が割に多かったと記憶しています。私は当時、村上先生の教室に在籍していましたが、村上先生を慕い、そして亀山先生の下で脳卒中を勉強したくて上京しました。

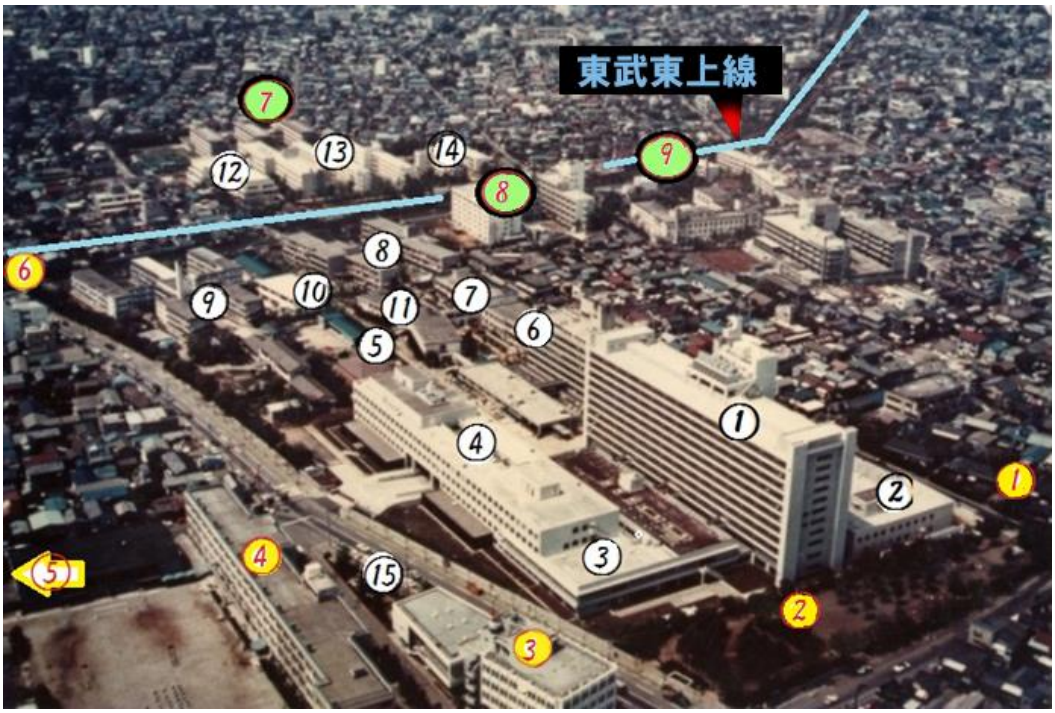
これだけの人が集まったという事実は村上先生のもつ魅力が小さくなかったことを意味していると思います。もちろん、日本で初めての本格的な老人専門病院であることも少なからぬ要因だったでしょう。でも、まだ実績がないのですから新しい構想、新しい建物だけでは人は集まりません。誰が選ぶのか、誰を選ぶのか、人事では大切なことです。ことに病院の場合—他の組織でも同じでしょうが、トップがどういう人かは重要な要素です。

新病院がスタート

1972 年、新病院のスタートと同時に併設の老人総合研究所も太田邦夫先生（前東大病理学教授）を所長に迎え、スタートしました。研究所には病院と同じように全国から優秀な研究者が集まりました。ここでは研究所については省略します。

新病院の開始に向けてだいぶ前から入院予約を受け付けておりましたが、その数が膨大になり、とても全部をひきうけることはできず、その対応に病院の管理側は苦慮したようです。こうした患者さんだけでなく旧病院の入院患者も移り、あっという間に満床になりました（看護師不足で最初は 700 床より少ない数でスタートしました）。

入院患者の多くは寝たきり状態等の今では療養型病院の適応となる状態の患者さんが多く、急性期疾患に重点を置きたいとの病院側の思惑とは違ったようです。当時、慢性期になっても受け皿になる病院や施設は整備されておらず（今でも不十分ですが）、結果として在院期間が長くなり、3 か月を越える人はざらでした。都立の老人専門病院ができたのだからできるだけ長く入院させてほしい、というのが患者側の希望でもありました。だが、そうなると今度は新たになかなか入院できない事になります。これが大きな問題でした。病状が落ち着いたら退院をうながす以外に良い解決方法はありませんでした。



昭和 50 年ころの
養育院板橋キャンパス航空写真

黒数字
① 東京都養育院付属病院
② 同 核医学棟
③ 同 外来棟
④ 老人総合研究所
⑤ 養育院講堂
⑥ 光風寮
⑦ 和風寮
→板橋ナーシングホーム
⑧ 明々寮
⑨ 恵風寮
⑩ 希望棟：板橋老人ホーム
⑪ 旧養育院付属病院
⑫ 板橋高等看護学校
⑬ 養育院看護婦・寮母宿舎
⑭ 医師公舎
⑮ 渋沢栄一銅像

赤数字
① 板橋大山公園
ゲートボール場
② 板橋大山公園
③ 板橋区産業文化会館
④ 板橋第一中学校
⑤ 板橋区文化会館
（地図の外）
⑥ 板橋警察養育院前交
⑦ 御茶ノ水女子大学寮
⑧ 豊島高等看護学校
⑨ 都立豊島病院

赤字の⑦⑧⑨ 以外は、昭和 30 年頃まで養育院の敷地！

もう一つの問題は内科系の病棟を臓器別にするかどうかという点でした。前からおられた医師は「老人は複数の病気を持っていることが多い。だから臓器別にわりきって分けることは難しい。患者を急性期と慢性期と病気の時期別に分けた病棟として、診療科の専門医は病棟にコンサルトに行き指導すればよい」との考えで既に病棟の配分等を決めておりました。そこへ新たに来た医長たちが臓器別病棟を強く主張したわけです。

当時は、内科は内科全般を診るとの考え方が主で、循環器、消化器、呼吸器等の臓器別診療科の考えかたはまだ始まったばかりの頃でした。後者はおもな疾患別に病棟を分けた方が診療上合理的だと主張したわけです。

両者とももっともな意見であり、しばらく決まりませんでしたが、結局、臓器別の病棟になりました。やはり、この方が診療する側も、受ける側も自然だったからと思います。この臓器別病棟は全国的にも早いほうだったと記憶しています。外来診療も最初は内科全般外来でしたが、やがて専門外来が独立して併設されました。

当時は高齢だからとの理由で、一般には、診断のための検査を控えたり、また積極的な治療を控えることが少なくありませんでした。高齢者に対して積極的にきちんと診療する、というのが新病院の使命です。

新病院では、たとえば外科では高齢者の悪性腫瘍を積極的に手術しようとの姿勢でしたし、内科系でも同じように積極的対応を心がけていました。リハビリテーションを重視したのはこうした姿勢の表れのひとつです。

今では当たり前のことを 40 年以上前から始めたわけです。

1972 年にオープンした養育院付属病院（中央）と老人総合研究所（右手前）
左手前は和風寮、後に板橋ナーシングホームとして運用。開院当初リハビリテーションが重視され、3 階東西の 2 病棟が当てられた。
他の病棟配置に多くの論議があった。

勉強できる病院

村上病院長は新病院の発足に際し、「皆が勉強する病院、勉強できる病院」であること、そして「病理解剖を重視する」ことを主な目標として掲げました。

前者についてはそのためにも研究所を併設し、互いに交流できるようにしました。

そして病院と研究所合同で内容の充実した図書館を創設しました。当時、病院がこれだけ立派な図書館を持つということは画期的なことでした。これは大きな財産でした。

病理解剖は旧病院時代から重視され継続されていました。これを引き継いだわけです。

当時、不幸にして病気で亡くなられた方を病理学的に調べること、いわゆる病理解剖は全国的にあまり重視されておらず、剖検率は全国的に低かったと記憶しています。

病理学的に調べて、はたして生前の診断は正しかったか（CT や MRI 等の検査機器はなかった時代です）、治療はこれでよかったのか、さらには主病変以外の副病変を見落としていなかったか、など、臨床医にとっては裁判の場に立つようなものです。さらには、生前の診療がきちんとしていて、納得されるものでなければ、病理解剖させてほしいと頼んでも遺族側は了承しないでしょう。こうしたプレッシャーによって医師個人の診療レベルは向上するでしょうし、病院全体としてもレベルが高くなるはずです。もちろん、単なる診断名にとどまらず、病気そのものが細胞組織学的にどんな特徴があるのか、その本態を探求するのも大きな目的です。

病院全体としては月に 2 回、各 2 症例ずつ、臨床病理検討会が開催されました。今も続いていると思います。最初の頃は剖検率が 80%以上と高かったのですが、その後、徐々に低下してゆきました。この低下にはいろんな理由があるのでしょうが、残念です。

病院の医師で希望する者は研究所の兼務研究員の資格が与えられました。私達はそれぞれが希望する方面で、研究所の生化学部門、生理部門、病理部門などで調査・研究する基盤が与えられたわけです。これは病院側にとって大変ありがたい制度で、病院医師の調査・研究の多くはこの制度を利用してなされました。

当時は老年者の病気に関しての調査・研究が進んでおらず、未知のことが多くありました。新病院で毎日、診療をきちんと行い、そうした症例を積み重ねるだけでそのまま研究発表や論文の内容になりえましたし、また、病理解剖所見と生前の臨床所見を対比検討しただけであらたな問題点が見つかったことも少なくありません。

数年後、副院長の亀山先生が京都大学の教授として招かれました。京都大学が東京大学出身者を教授として迎えるということは例外的な出来事で、京大教授の一人が「あの人しかいない」と強力に推薦した結果だと聞いております。

その後、京都大学の老年科、神経内科が急速に発展したことは広く知られています。

ただ、村上院長は「あの人がいなくなって一番困るのは僕だよ。でも偉くなって行く人を止めることはできないからね」と嘆いておられました。

スタートから 10 年ほどは年々発展していったように思われます。医師のみならず各分野で学会発表や論文が数多く報告され、日本の老年医学・医療の進歩に少なからぬ貢献をしたと自負しています。

その後も病院から数多くの医学部教授が誕生しました。一つの病院からこれだけの数の教授が出たのは例がないのではないかと当時言われたほどです。

もちろん、教授が多数誕生したからといってその病院が良い病院だとは断定できません。でも、教授に選ばれるということは臨床面での実力が評価され、そして研究面での実績が評価された結果でもあります。個人の資質も重要な要因ですが、「きちんとした診療をしよう、勉強しよう」との病院の姿勢も大きな要因だったと思っています。各診療科で差はあるでしょうが、全体としてかなりレベルの高い老人専門病院だったと私は思っています。

いつまでも発展し続けるだろうと思っておりましたが、いつのまにか停滞期に入っておりました。停滞期以後のことはまた別に述べる機会があるでしょう。今回は昭和 47 年の新病院の発足から、その後の発展期について書きました。

『養育院』創立 100 年記念式典 1972.10.25
. 左から大田邦夫研究所長、村上元孝病院長、
吉田千秋養育院長、美濃部亮吉都知事

現在の東京都健康長寿医療センター
研究所を併設し、診療部門は急性期病院に特化して
運用されています。

絵で見る 終戦直後の養育院

宮本孝一（老年学情報センター）

櫻園通信 31.
平成 28 年 1 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

東京都健康長寿医療センターの職員用図書館“老年学情報センター”に 110cm×70cm の大きな油絵が保管されています。

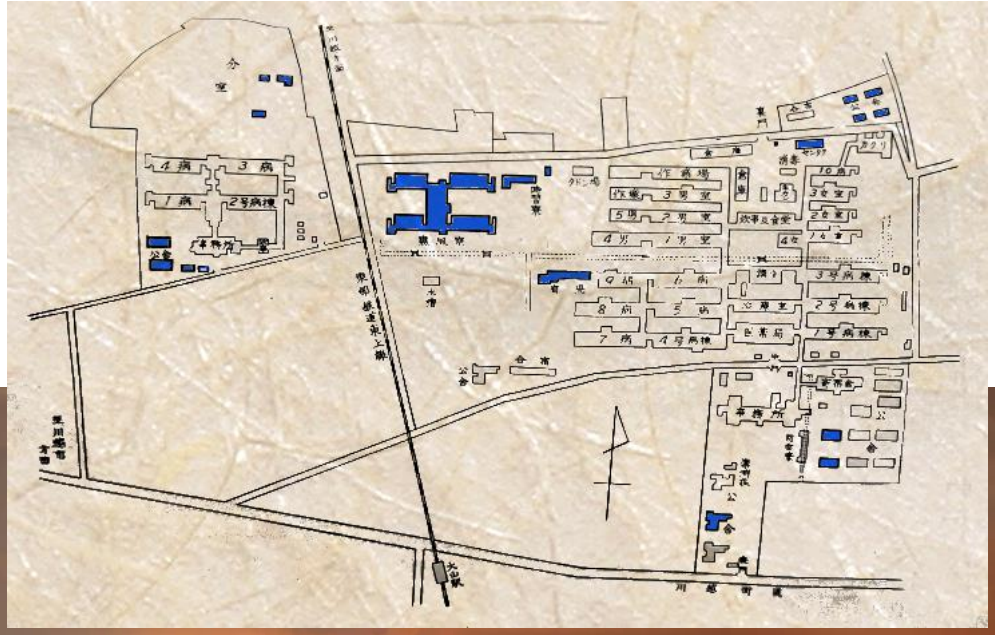
額の中には「昭和 25 年当時　養育院板橋構内」という画題が貼られています。 絵には「T.Ohbuchi　1950」のサインが書かれています。

この絵は、旧施設の倉庫に保存されていたもので、新医療センター移転時に老年学情報センターに運びました。作者がどういう人物で、いつどういう経緯で所有することになったのかは不明です。

この絵では、養育院の南側には家が無く、広い緑地になっています。しかし実際は終戦直後から民家が建ち始めていました。

養育院の再建

- 1945（昭和 20）年
  終戦。養育院の残存施設と隣接する軍事施設の寮を使用して病院機能の確保が図られる。
- 1946（昭和 21）年
  施設設備復旧のため、炊事場を新設。
  浮浪者・浮浪児の収容者激増。
  板橋区に養育院立退き運動が起こる。区は養育院敷地への文化センター・中学校建設に関する嘆願書・請願書を都議会に提出。
- 1947（昭和 22）年
  印刷工場と本院事務所を新設。民生局・養育院と区で交渉開始。養育院本院敷地の公園化が協定書に盛り込まれる。しかし養育院移転候補地の選定は難航。
- 1948（昭和 23）年
  養老施設「明々寮」、浴場、ポンプ室、作業場兼講堂を新設。
- 1949（昭和 24 年）
  GHQ 軍政部キャロー女史が養育院の現地再建を指示。
- 1950（昭和 25）年
  成人保護寮、養看護施設開設。
- 1951（昭和 26）年
  養育院付属看護学院設置。改正東京都養育院条例の公布。



青い建物が終戦直後の残存施設です。
空襲で、養育院の建物のほとんどが失われました。

年学情報センターで保管している油絵を、コンピュータで画像処理し、夕暮れ時の養育院の光景を再現してみました。

櫻園通信 第32号

櫻園通信 32. 平成 28 年 3 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー

穂積橋 ほづみばし

越前藩の松平春嶽、宇和島藩の伊達宗城、土佐藩の山内容堂、薩摩藩の島津斉彬は、幕末の政局において公武合体を目指し、幕末の四賢侯といわれた。

その一人の伊達宗城の城下町が四国の宇和島にある。今日は古いお城が主な観光資源となっているひっそりとした小さな町であるが、宗城治世の幕末には、高野長英、大村益次郎、二宮敬作(F.シーボルトの弟子)、お稲さんなども住み、当時先進的な文化の栄えた町である。

穂積橋　宇和島市の中心部の辰野川にかかる

町の中心を流れる辰野川に、「穂積橋」という観光名所がある。小さな橋であり、橋のたもとに大きな郷土料理の店「ほづみ亭」がある。橋のたもとに四国ガス寄贈の古めかしいガス灯がある。

橋のたもとの小公園に、郷土出身の偉大な法律家、穂積陳重(ほづみ　のぶしげ)のことばが、解りやすい言葉でかかれた新しい石碑がある。

> 老生は銅像にて仰がるるより
> 萬人の渡らるる橋になりたし

と書いてある。

さて、橋の名前の由来となった穂積陳重のことであるが、宇和島出身の人で、旧宇和島藩の貢進生として、 16 歳の時上京、南校(東大)を卒業し、日本で最初の帝国大学法学博士になっている。

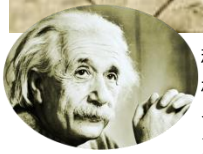
日本における民法の生みの親と言われているが、縁あって、渋沢栄一の長女歌子と結婚している。しっかり者の長女歌子とその婿の穂積は渋沢家・家法の制定など、一族に強い影響を与えている。

渋沢栄一が静岡藩から明治政府に移る明治 3 年、伊達宗城が松平春嶽の後の民部・大蔵卿を務めている。明治政府設立当初の議定(重要閣僚)であった松平春嶽と伊達宗城は、もともと公武合体が身上であるが、新政府に徳川人の登用を試みている。伊達宗城大蔵・外務卿の秘書の郷純造の推薦で渋沢は明治政府にリクルートされることになる。

始め渋沢は固辞しているが、断れば静岡の徳川慶喜の立場が悪くなると大久保一翁に説得されて上京、さらに大隈重信に説得されて、

日本最初の法学博士
穂積陳重

渋沢栄一の長女
歌子



穂積陳重は大正十一年に小石川植物園で開催されたアインシュタイン夫妻公式歓迎会にも出席。アインシュタインは日本に向かう途中でノーベル物理学賞受賞の知らせを受けた。

明治3年に改正係長に就任している。

山本七平の書に詳しいが、改正掛というシンクタンク的な組織の長となり、旧幕臣の前島密、杉浦愛蔵らも引き込むことになる。大久保は旧幕時代から、松平春嶽や伊達宗城とは気脈を通じている関係があってのことである。次第に明治政府の要衝は薩長閥に占有されては行くとはいえ、後の明治 5 年に、大久保一翁や勝海舟が明治政府に任官する布石となっている。また、渋沢家の長女の婿に伊達宗城地元の俊英・穂積陳重を配した背景には、渋沢栄一と伊達宗城とのこのような関係がある。

陳重は学究一途にとどまることなく、貴族院議員、帝国学士院第1部長、文政審議会委員などの要職に就き、晩年には枢密院議長をも務めたが、1926(大正15)年4月 7 日、71歳で死去している。また、本業の民法関係のほかに隠居論という大部を出版しており、社会への強い関心は、は彼の法学の骨格をなすものと言えよう。

さて、穂積橋のことであるが、橋の袂の古い石碑には、命名の由来が詳しく書いてある。橋のたもとのほづみ亭側に石碑がある。もともと宇和島尋常小学校に、昭和 3 年の御大典記念に建てられたものが移築されているのだ。

橋の命名の由来を書いた古い石碑

ほづみばし　　橋名の碑

法学博士男爵穂積陳重先生は、我が郷土の生んだ偉人であり、われら市民の慈父である。曽て同郷有志の間に、先生の銅像を建設したいという相談が起こった際先生は徐にこれを志りぞけ、先生は、「銅像にて同郷萬人に仰ぎ視らるるよりは、橋となって公衆に履んで渡らるるを以て無上の光栄とす。」と仰せられて、容易にこれをご承認下さらず。偶々本年の春、本開橋が改築されたので、茲に有志は県の許可を得てその名を改め「ほづみばし」と称して先生永久の記念とした。ああ、橋名すでに命ぜられて先生今や亡し、我等は銅像を仰いで高徳を敬慕できぬけれど、この橋をわたって伏して深恩に感謝することを忘れてはならぬ。

御即位大禮記念事業の一つとして
昭和五年十月十日　これを建つ。
宇和島高等尋常小学校職員児童一同

穂積陳重夫妻は、渋沢銅像の設立に関しては、一家こぞって参加している。

穂積にとって銅像は、岳父の偉大な姿であり、多くの銅像を見せられて、俺は結構だという堅い気持ちがあったように思われる。

今日、石碑や観光パンフレットの「ほづみ橋」の記載の中では、渋沢栄一には全く言及されていない。

穂積は 71 歳と比較的長命ではあったが大正 15 年に死去している。渋沢は 91 歳とさらに長命であり、橋のできたとき渋沢栄一はまだ存命で、国民的英雄視されていた。橋の名がつけられた当時は、穂積と渋沢の関係は、宇和島の関係者の間では周知の事であったろう。しかし、渋沢への遠慮が碑の説明に反映されているのであろう。ただ、渋沢が文明国の象徴として東京に瓦斯灯建設に心血を注いだガス灯が橋の脇にあることが、辛うじてそのことをしのばせる。

東京・板橋区の巨大な渋沢栄一銅像。板橋区の登録文化財に指定

ほづみ亭で、郷土料理の昼食をとったが、湯飲み茶碗にこの名言が焼き付けてあった。店員は渋沢のことは全く知らず、ただ穂積橋の袂の料亭という意味で名付けられたという。事情を話して、同店開業記念の湯飲み茶碗をいただいた。このような次第で、展示ケースに、穂積の「隠居論」、湯飲茶碗と、穂積橋の写真を展示している。

（稲松孝思）

ほづみ亭の湯飲み茶碗

隠居論　高齢者への社会的対応のあり方を説いた**世界的にも老年学の先駆け**といえる書